

『元朝秘史』の“モンゴル英雄叙事詩”的研究 —現代に残る伝説から『元朝秘史』の物語分析へ—

藤井真湖

1. 本論の目的

13世紀前半～14世紀半ばまでには成立したと言われている『元朝秘史』（以下、秘史）を筆者はここ数年のあいだ“モンゴル英雄叙事詩”という観点から考察してきた。これまでの考察をこのたびの第3回東方ユーラシア・ノマッド文化研究シンポジウムにおいてまとめた形で紹介する機会を得ることができたことは幸いであった。本稿においては、このシンポジウムで発表したことをもう少し理解しやすいものにして紹介することを第一の目的としたい。筆者にとっても、自身の秘史研究をどのように進めてきたかを現段階で整理・確認しておくことは意味のあることだと思われるからである。

これまで発表してきた媒体は様々であるが、考察の順としては6つ目に当たる『元朝秘史』における「語り手」—“サアリ草原”という地名との関連で—の論考はモンゴル国の首都ウランバートルで行われた第5回ウランバートル国際シンポジウム『チンギス・ハーンとモンゴル帝国：歴史・文化・遺産』（2012年7月24日～7月26日）で発表したもので、その原稿もモンゴル語翻訳とともに公刊されたが（書誌事項は後続の2.2.の(6)を参照）、日本では入手が難しい。それゆえ、この機会に本稿ではこの論文を末尾に「資料編」として再録させてもらうことにした。

2. 秘史研究の枠組みと概要

2. 1. 研究の枠組み

これまでの研究の概要を整理する前に、秘史をどのように位置づけて考察してきたかをここで確認しておくことにしたい。

●対象のジャンル規定

秘史を筆者は当該文化を特徴づけてきた“英雄叙事詩”の源流として捉えている。筆者が現在のところ考える“英雄叙事詩”とは一般的なジャンルとして通用している（と思われる）ものとは若干異なる。伝説などのように「伝統的に」別のジャンルとして扱われてきたものも含む幅広いものである。筆者の言うところの“英雄叙事詩”とは、明示的に読

み取れる意味とは真逆の、あるいは対照的な非明示的な意味をもつ物語叙述の総体である。それゆえ、必ずしも名称として“英雄叙事詩”にこだわることもないものである。伝承の媒体も口頭でも文字でもよいし、韻文で構成されている必要もない。

●対象の範囲

四部叢刊本の続集2巻を含めた計12巻を戦略的に「ひとつの作品」とみなし—これには明らかに異論もあろうが—、この総体を対象とする。秘史の編集過程においては多くの説があるが、現在のところ、連続体のものとして敢えて扱っている。

●対象文献

筆者の秘史研究においては、言語の面に関しては四部叢刊本を定本として編まれた栗林均・确精扎布編『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』（2001年）および『「元朝秘史」モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』（2009年）を参照とし、訳語に関しては小沢重男の『元朝秘史全訳』3巻と『元朝秘史全訳続攷』3巻（1984～1989年）及び岩波文庫の『元朝秘史』上下巻（1997年）をもとにしている。

●分析の方法論

テキスト読解の方法論においては、ロラン・バルトが『物語の構造分析』で示した構造分析にもとづいている。この方法論は、歴史学における方法論とは異質なものである。文学の構造分析的アプローチと歴史学のアプローチとは、当該文献に対する言語観に根本的な差異がある。歴史学においては言語を現実に生起した事象を反映している—反映の際のイデオロギ的歪みはある程度は認めてもいる—とみるが、筆者の採っている言語観は構造主義的立場に立つものであるため、言語は現実の反映でなく言語＝世界だということがある。言語観のこうした差異は当然ながら秘史の読解に多くの差異を生み出している。それゆえ、本論の研究においては、歴史家であれば当然扱う各種の史書を参照にしていない。いずれ、本論のような文学研究における非明示の意味が、現実に生起した史実なるものとの間にいかなる連関があるのかは克明にフォローされる必要があるだろう。

2. 2. 7つの論考の概要

以下、(1)～(7)として、7つの拙稿の概要を示すことにする。

(1)「チンギス・カンをめぐる伝説の諸相—『チンギス・カンの伝説と歴史の地』という小冊子をもとに—」『愛知淑徳大学現社会研究科研究報告』第4号、2009年、41—56頁。

概要：本稿は、2002年にモンゴル国で刊行されたN. ナムスライ編の小冊子に収められた42編のチンギス・カン関連の伝説をもとにその諸相を論じたものである。この論考の前半は、現代に伝説を記録するという行為が持つ意味を考える部分となっている。とくに、伝説で述べられている地名や自然における遺物が実際には刻々と変化していることに注意を喚起させた。伝説の地はしばしば半永久的なものとして受け止められているが、こうした変化の諸相こそ現代の伝説研究における前提となると考えたためである。本論ではそれ以外にも、伝説で語られる事柄には、社会主義時代におけるモンゴル—ロシア関係やチンギスの生誕地がどこであるかなどに関する記録者の含意など、伝説には多分に政治的な意味合いがあることに言及しておいた。

その上で、伝説の古層として取り出せるのが、チンギス本人というよりも、チンギスと愛憎入り混じる人物の名前であることを指摘した。それらは、①チンギスの異母兄弟ベルグテイ、②ベルグテイの兄ベクテル、③イエスイ、④フフチュの4人である。①のベルグテイは秘史によれば兄のベルグテイをチンギスとカサルに殺されているが、チンギスがモンゴル帝国をつくるさいに尽力した人物である。②のベクテルは秘史によれば、チンギスに殺された人物である。③のイエスイ妃は、自分の夫をチンギスに殺された後、チンギスの妃になった人物である。④のフフチュは秘史によれば、チンギスの側近であったが、増長したとされてチンギスの命令でチンギスの弟オトチギンに抹殺されるシャマンである。これらの人物はすべて、ある面でチンギスと肯定的、別の面で否定的関係にあった人物といえる。

これを踏まえて秘史を改めて眺めると、ベルグテイの叙述とイエスイ妃の叙述は近接していることがわかる。これを偶然ではないとすると、この場合、チンギスの父イエスゲイが娶っていたベルグテイの母の出身は秘史において何ら叙述がないものの、この人物の出身をタタルだったと仮定すれば、話の辻褄がいろいろ合うことが判明した。じっさい、ベルグテイは兄ベクテルをチンギスとカサルに殺害されており、イエスイは自分の夫をチンギスに殺されているので、両者には共通性が認められるのである。秘史においては“ベルグテイの母”としてしか呼ばれない女性がタタル出身者ではないかというこの論の仮説は、次の(2)、(3)、(4)という3つの考察に発展していくことになった。

(2) 『元朝秘史』第53節～第68節の有機的解釈の試み—“ベルグテイの母”の出自の仮説をもとに— 『言語文化学会論集』第34号2010年、167—179頁 [本論文の要旨は2009年12月6日に言語文化学会(於愛知淑徳大学)、および2010年3月30日に臨時講演会(於

中国内蒙古社会科学院)にて口頭発表]

概要：(1)の考察の延長として、秘史全 282 節のうちの第 53 節から第 68 節を考察した。秘史の第 53 節～第 68 節という範囲を選んだのは、この範囲においてアンバガイやイエスゲイといったモンゴル＝タイチウド連合のリーダーが次々にタタルの裏切りによって殺されていることから、モンゴル集団のタタル集団に対する怨念は、まさに秘史の当該範囲において強固に形成されたと考えられるからである。このような状況において、モンゴルとタタルの関係において、モンゴルがタタルとも婚姻関係を結んでいたとすれば、その事実が隠蔽される可能性は十分に推測しうる。また同時に、隠蔽されるために生じる矛盾もまた立ち現れてくるに違いないと推測されたからである。

実際、チンギス・カンの異母兄弟の“ベルグテイの母”の出自をタタルとした場合、イエスゲイがタタルの宴会に立ち寄って毒を盛られるという秘史の有名な事件もまた新たな観点で捉えられることになる。タタルがイエスゲイにとって敵であるものの姻族でもあったとなると、イエスゲイがタタルの宴会に立ち寄るという行為は決して“油断”ではなかったことになるからである。イエスゲイが死の直前にチンギスを姻族のもとから実家に連れてくるよう命じている叙述は、イエスゲイがタタルの宴会で毒を盛られた出来事と無関係に見えるが、実際には密接に関係しており、姻族が場合によって最も恐るべき敵となることを知ったイエスゲイがチンギスを守ろうとした行為であることを指摘した。

(3)『元朝秘史』第 268 節におけるイエスイ妃に関する叙述—グルベルジン・ゴア妃の伝説からみた解釈—『現代社会研究科研究報告』第 5 号 2010 年, 41—56 頁[2010 年 6 月 6 日におこなわれた第 34 回日本口承文芸学会大会(於立正大学)で口頭発表]

概要：(1)と(2)の考察に基づき、ここではタタル出身のイエスイ妃に焦点を当てた。とくに、チンギス・カンの死に言及されている第 268 節における、チンギスの死後、西夏の領民の多くがチンギスの后イエスイに与えられたという叙述に着目した。なぜなら、チンギスの死ぬ際にタタル出身の后が同行していたという叙述は、(1)や(2)の考察を考慮に入れると、偶然とは思われないからである。実際、秘史で描かれるイエスイ後の運命は、チンギスを殺害して黄河に入水自殺を遂げた西夏の最後の王妃グルベルジン・ゴア妃の伝説—これについては秘史には書きとどめられていないが—を強く想起させる。イエスイ后とグルベルジン・ゴア后には、夫をチンギスに殺害されていること、夫を殺された後にチンギスの妻となったことの 2 点で重要な共通点が認められる。前夫をチンギスに殺害されていることは、両者を結びつける結節点となっている。実際、秘史においてイエスイ

后がチンギスに後継者を決めるよう進言したことは、まさにこの前夫の殺害がなければありえなかったと考えられる。後継者を決めるということはチンギス亡き後のことを意味するが、前夫をチンギスに殺されている女性だからこそ、夫チンギスの死に触れることができたという事情を考慮に入れなければならないであろう。グルベルジン・ゴア後の伝説は、一般的には悲劇的な話として理解されているといえる。なぜなら、夫を殺されチンギスの妻となったグルベルジンはチンギスを殺害したあと黄河に入水自殺を遂げているからである。しかし、この伝説は非明示的には真逆の意味もあったと考えられる。なぜなら、グルベルジン后は亡くなったとはいえ、チンギスに殺害されているわけではなく、自らの強い意思で自身を殺したとも言えるからである。そのように見る場合、この伝説で殺されたのは唯一チンギスのみであることが浮き上がるのである。この考察で論じたことは、イエスイ后こそグルベルジン后の物語を作ったり語ったりする人物として相応しい人物ではないかということである。イエスイ后は、この物語を語ることによって殺された前夫の仇をチンギスから取ると同時に、チンギスの妻であるイエスイ自身がその物語を語ることにより、チンギスも「自らを殺させる」という積極的死を遂げるという、チンギスの名誉回復もおこなうことになるからである。それゆえ、秘史の§268の叙述において、チンギスの死後、西夏の領民の多くがチンギスの后イエスイに与えられたという叙述で閉じられていることは、意図的に仕組まれたものである可能性が高いとした。

(4) 『元朝秘史』におけるベクテル、ベルグテイ、“ベルグテイの母”の考察—“ベルグテイの母”の出身仮説をもとに—『愛知淑徳大学現代社会研究科論集』6号 2011年, 21—41頁[なお、本発表は2011年2月22日に(於千葉大学のモンゴル研究会)口頭発表]

概要：(1)、(2)、(3)の延長として、ここでは、タタル集団の問題をさらに掘り下げるため、チンギス・カンの異母兄弟であるベクテルとベルグテイという2人の兄弟、そして彼らの母“ベルグテイの母”の3人に着目した。この3人はチンギス・カンの父イエスガイ・パートルの「正妻ではない」妻とその2人の息子から構成される「もう一つのチンギスの家族」といえる。イエスガイがタタル集団によって殺害された後、イエスガイの正妻ホエルンとチンギスを始めとする子供たちは、このもう一つの家族と身を寄せ合って暮らしていたことが秘史から読み取れるが、決して多くは語られない。

しかし、イエスガイの正妻ではない妻である“ベルグテイの母”をタタルの出身者と仮定してこの3人の叙述をそれぞれ考察すると、秘史では明示的には語られなかった幾つかの重要な事柄が浮かび上がってくる。その最大のものは、“ベルグテイの母”が実はイエス

ゲイの正妻だったのではないか、ということである。アンバガイがタタル集団の裏切りで横死したことにより、イエスゲイはタタル出身の妻“ベルグテイの母”―当時、ベルグテイは生まれていたかどうかは不明であるが―を娶っていたため、政治的に不利な立場に追い込まれたと推測される。それゆえ、本来娶べき正妻はメルキトに奪われていたので、メルキトからホエルンを略奪するという奇策により、ホエルンを正妻にすげ替えたのではないかという考察をおこなった。この論を傍証するように、メルキトがチンギスの正妻ボルテを奪う事件についての叙述において、じつはボルテよりも“ベルグテイの母”が先にメルキトに捕えられていることを指摘した。筆者はこれを偶然ではないと考え、メルキトにとって“ベルグテイの母”を奪うことは過去の因縁としてなされなければならないが、時代はすでにチンギスの時代に入っていたので、チンギスの正妻を奪うことでイエスゲイの後継者であるチンギスに打撃を与えたかったのではないかと解釈した。最終的な事件の結末として、ボルテはメルキトから奪回される一方、“ベルグテイの母”だけはベルグテイが近くまで迎えに行くにも関わらずメルキト集団に残ることを決意している。この背景には、“ベルグテイの母”が息子のベルグテイの出世にはベルグテイの出自におけるタタルの影を消す必要があると考えたためであろうと推測した。

(5) 『元朝秘史』の地の文における“我々”表現に隠された意図―巻3第110節～巻11第263節における一人称複数形についての考察―』『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』7号 2011年, 45-66頁 [前半部分については、2011年8月10日に The 10th International Congress of Mongolists で On the pronoun first-person plural in the non-conversational part of the SHM- Study on the “writer(s)” of the SHM through scrutinizing “we” forms from §110 to §263 (Mongolian National University, Ulaanbaatar, Mongolia), 全体像については 2011年日本モンゴル学会秋季大会 (於大阪大学) で発表]

概要：(1)～(4)の論考においてタタル集団に着目するときに必然的に浮上してくるのは、秘史の「作者」がタタル集団に好意的であったということである。こうした「作者」の偏好に気づくと、「作者」への関心が呼び起こされるのであるが、「作者」にアプローチする方法はそう簡単には得られるものではない。そこで、「作者」を直接扱うわけではないものの、「作者」と何らかの関連がありそうな秘史の「語り手」に焦点を合わせていくことになった。この「語り手」への関心は、次の(6)や(7)にも引き継がれていくことになった。

秘史の「作者」に迫るための手がかりとしてここで注目したのが、秘史の地の文におけ

る“我々の兵士達”というような表現である。この表現は「我々のサアリ草原にいるジョチ・ダルマラ」のように、多少ヴァリエーションを持ちながら秘史に現れるので、ここではそれらをまとめて“我々”表現と呼んだ。“我々”表現は、「作者」を直接表わす表現ではなく、「語り手」を表わす表現である。とはいいいながらも、“我々”表現は「作者」と何らかの関係のあると見込まれる。この“我々”表現は、一人称でないながらも、むしろそのために「語り手」のスタンスが浮き彫りになるという点で、興味深いものである。ここでは、秘史に現れる全ての“我々”表現を取り上げ、その表現が現れる文脈を精査した。その結果、「語り手」がもともとどのような集団に属していたのか、そしてどの集団あるいは個人に対して忠実であろうとしたのかが徐々に明らかになった。この考察の中で明らかになったことは、「語り手」がもともとはタイチウド集団にいたが、ボルテをメルキトから奪回後、チンギスとジャムカが分かれたさいにチンギス陣営にククチュという子供を連れて投降した人物だということである。タイチウド集団からチンギス陣営へ「語り手」が移動していることは、秘史におけるその他の多くの叙述に影響を与える大きな出来事である。それゆえ、どのように「語り手」のこの移動を明らかにしたかを以下に記しておく。

まず、この事態の顛末を述べるには、ボルテがメルキトに奪われた事件—ボルテ夫人事件と名づけておく—から説き起こすことにしたい。チンギスはボルテ夫人事件をうけて、ケレイトの王罕に救援を要請する。王罕はその際にジャムカにも対メルキト戦に参加させる。“我々”表現という形で「語り手」が初めて登場するのは、ボルテ夫人救援のために急遽編成されたこの3部隊の中である (§ 110)。このことは、「語り手」が王罕の部隊かジャムカの部隊の中にいた人物だということを示している—むしろチンギスの部隊は他の2部隊に比べて無きに等しいものであったと考えられるが—。そして、3軍でボルテを奪回し王罕が故地に帰った以降においてさえ、「語り手」はタイチウドのベストの宿営地に取り残されていたククチュという幼児をチンギスの母ホエルンに贈呈していることが観察される (§ 119)。それゆえ、「語り手」は王罕の部隊ではなく、ジャムカの部隊にいたことになる。

しかし、不思議なことに、ジャムカの部隊にいたと想定されるにもかかわらず、ククチュを連れてくるさいに、「語り手」は既にチンギス陣営の人間として叙述されている。この矛盾をうまく説明する方法として唯一考えられるのは、ククチュをホエルンのもとに連れて来たまさにその時に、「語り手」はジャムカ陣営からチンギス陣営に移動したという解釈である。つまり、「語り手」は、必ずしもタイチウドの出身者でなくともよいが、もともとタイチウドに属していた。そしてタイチウドはジャムカ陣営にいた。これに基づけば、「語り手」はジャムカとチンギスが決別したすぐあとにジャムカ陣営からチンギス陣営に移行

したということになる。

この論では、「語り手」がチンギス陣営に移動してからもなおジャムカに忠誠を誓っていたこと、また、最終的には、サルタウル人のヤラワチやマスグドといった西域のテクノクラートとの出会いを契機として、どのような主人に仕えるかではなく、どのような主人であつても無関係に力を発揮できる高度な専門技術をもつテクノクラートとして生きる決意をした痕跡がみえることを指摘した。

(6) 『元朝秘史』における「語り手」—“サアリ草原”という地名との関連で— (モンゴル国の首都ウランバートルで行われた第5回ウランバートル国際シンポジウム『チンギス・ハーンとモンゴル帝国：歴史・文化・遺産』(2012年7月24日～7月26日)で発表した。[シンポジウムの原語でのタイトルは、Чингис Хаан Ба Монголын Эзэнт Гүрэн:Түүх,Соёл,Өв (Олон Улсын Эрдэм Шинжилгээний V Хурал 2012.07.24-26. Улаанбаатар хот),Редактор: Д.Шүрхүү,Б.Хүсэл,Иманиши Жүнко, Б.Сэржав, Орчуулгын редактор: Б. Сэржав, Хэвлэлд бэлтгэсэн: А. Сосорбурам, М. Болормаа,2013он.рр.112-140.

概要：これは、秘史の「語り手」論である(5)の延長上にある論考で、「語り手」をついに同定したものである。この論は、本稿末尾の[資料編]に再録させてもらったので、詳細はそちらにゆずる。(5)でも指摘したことであるが、「語り手」が登場する箇所には多く“サアリ草原”という地名が現れている。そこで、“サアリ草原”に着目すれば、「語り手」に接近することができるのではないかと考え、秘史にこの地名の現れるすべての箇所を検討した。考察の多くは(5)で取り上げた箇所と重複するのであるが、重複しない箇所において、ついに「語り手」の候補者が立ち現れてくる。その候補者とは、バアリンのナヤアである。ナヤアという人物はたしかに候補者として相応しい。なぜなら、明示的にも、この人物はもともとタイチウドにいたものの、後にチンギス陣営に移行したと叙述されており、(5)で考察した「語り手」と重要な共通点を持っているからである。

そこで、このナヤアが登場する秘史の箇所を詳細に検討すると、この人物は、チンギスの敵の集団が差し出す女性をチンギスに無事に送り届けるという行為でチンギスの信用を首尾よく得たらしいことが明らかになった。バアリンといえば、チンギスに *ulus-un ejen* になる際の神託を述べたコルチ・ウスンという人物が思い出されるが、ナヤアはこのコルチ・ウスンと対比的に叙述されており、コルチ・ウスンよりも優位に位置づけられていることが観察される。コルチ・ウスンが § 120 の時点でチンギス陣営に移行しているのに対

し、「語り手」はその一節手前の § 119 においてチンギス陣営に移行しているので、投降の時期の早いナヤアのほうがチンギスの能力をより早く判断できたということになるからである。

考察の結果、「語り手」＝ナヤアは、自身のアイデンティティを広義のバアリンよりもニチュグウト・バアリンに、ニチュグウト・バアリンよりもナヤア個人というように規定していることが判明した。集団よりも個人のアイデンティティに重点が置かれているのは、ナヤアが女性から信頼されていたことにあり、これは集団的資質ではなく個人的資質によるものと判断したからである。じっさい、コルチ・ウスンはチンギスに 30 人の女性を娶ることを所望したという内容が明示的にあることから、コルチ・ウスンが女性に対する過剰な欲望を持っていたことは明らかである。コルチ・ウスンのこうした性癖は、ナヤアが女性から得た信頼あるいはチンギスから得た信頼とは相容れないものだといえよう。

(7) 『元朝秘史』におけるソルカン・シラとジェベ—gelbüre kö'ün＝「語り手」の仮説をもとに— 『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』第 9 号 2013 年, 17—34 頁。

概要：これは、(5) や (6) の延長上にある秘史の「語り手」についての考察である。ここでの関心の所在は、「語り手」はなぜタイチウド集団からチンギス陣営に移動したのかという理由を探ろうとしたところにある。むろん、すでに (6) の論考で、この人物がタイチウド集団から真っ先にチンギス陣営に移行したのは、この人物が誰よりも早くにチンギスの能力を見抜いたからであるとしたがっていたことを指摘していた。しかし、このことはあくまでも非明示的なレベルでのことであり、明示的な叙述においては、ナヤアは不自然なほど理想的な投降をしている。すなわち、タイチウドの領袖であるタルクタイを逃してやってからチンギス陣営にきたことになっている。この場合、真の投降は、非明示的に示された時期であると考えられる。なぜなら、明示的に示されたチンギスへの投降が理想的なのに対して、非明示的に示されたチンギスへの投降は、この人物がいち早くチンギスの能力を見抜いたとも言えるが、同時にいち早くもとの主人を裏切ったことを示しており、非明示的なほうは隠さなければならなかったと考えられるからである。明示的に描かれた投降が理想的で且つ虚偽だとすると、非明示的なレベルにおける「語り手」のチンギス陣営への移行の背景を、「語り手」が人を見抜く能力があったことだけに求めることはできないように思われる。そこで、「語り手」がチンギス陣営に移行せざるをえない何らかの事情があったのではないかと推測した。

このような視点で、タイチウドについての叙述箇所を追跡していくと、この理由に該当

するような事件の叙述に遭遇した。それは、秘史の §81 に見える叙述である。そこにおいては、タイチウドがテムジン（チンギス・ハーンの幼名）を誘拐したときに、“怖がりの若者”（gelbüre kö'ün）と表現されている人物がテムジンを逃してしまうという事件が語られている。この人物にとって、これはまさに「失態」以外のなにものでもない。

そうであれば、どの程度かはわからないが、「失態」を犯したこの若者は、タイチウド集団のなかでかなりまずい位置に立たされたであろうと想像される。しかし、この「失態」は、チンギスにとっては好機となったわけである。つまり、この「失態」はチンギス陣営に投降しさえすれば、逆に「功績」に好転することになる。このことから、この gelbüre kö'ün を「語り手」と同一人物、あるいは語り手が好意を寄せていたタイチウド内の人物と考える余地が浮上してきたのである。そして、敢えてここでは「語り手」と同一人物であるとみなして考察を進めてみた。

この仮説を前提にすると、タイチウドの中でも gelbüre kö'ün とは反対に、チンギスを助けたソルカン・シラが秘史でどのように叙述されているかが気になる。そこで、ソルカン・シラの叙述箇所を観察すると、ソルカン・シラよりも息子たちが好意的に描かれており、ソルカン・シラの功績が全面的に出ないようになっていることが観察された。このことは「怖がりの若者」＝「語り手」の仮説に沿った叙述の仕方といえる。それだけでなく、ソルカン・シラがチンギス陣営に投降するさいには、ジェベという人物も一緒に投降しており、その投降のスタイルにおいて明らかにソルカン・シラよりもジェベが好意的に叙述されていることが判明した。そこで、ジェベの出現するすべての箇所を検討したところ、重要なことが明らかになった。それは、ジェベが言及されている事例のうち §193 における事例である。

§193 では対ナイマン戦が叙述されているが、この一連の叙述は言語トリックとなっており—これは（5）の論考で明らかにした事柄であるが—、実際には何も起こっていない。この節には“我々の斥候”という「語り手」を示唆する表現が4度も出現しているだけでなく、「語り手」と深く関わりのあったと考えられるサアリ草原も対ナイマン戦の舞台として言及されている。つまり、この §193 は「語り手」が全面的に関わっている箇所であることは明らかである。それゆえ、ジェベに対する好意的な描き方は、「語り手」と密接に関わっているということになる。

何よりも重要なのは、この節の冒頭に“鼠の年、夏の初めの月の十六日”（qulqana jil jun-u teri'ün sara-yin harban jirwa'an üdür）という表現が見えることである。なぜなら、この（7）で考察した、チンギスを取り逃がしてしまう“怖がりの若者”が現れる §81 においても、

“鼠の年”というような十二支による年の表示はないものの、“夏の初めの月の十六日” (jun-u teri'ün sara-yin harban jirwa'an-a) という表現が見えるからである。本論においては、このような特殊な表現はこの 2 つの節以外では秘史で見られないとされていたが、実は、このような表現は、秘史においては、もう一箇所現れるので、この紙面を借りて訂正しておきたい。しかし、もう 1 箇所現われたかといって、本論の結論には影響はないことも以下において示しておきたい。

新たに加わったのは巻 3 § 118 において現われる事例である。§ 118 では、メルキトに奪われたボルテ夫人を奪還した後、しばらく親しんでいたチンギスとジャムカが袂を分かつという内容が綴られている。この § 118 は、「語り手」がタイチウド（ジャムカ陣営に属していたと考えられる）からチンギス陣営に非明示的に移動した § 119 のすぐ直前の節に当たる。つまり、§ 118 は非常に重要な節であるといえる。なぜなら、§ 118 において、ジャムカに忠誠を誓っていた「語り手」はジャムカから離れることになるからであり、この点において、もう 2 つの事例と大きな共通点を持つことになるからである。

その共通点とは、3 つの事例がどれもみな「語り手」とジャムカの別れに関する内容になっているところにある。最初の事例である § 81 では、「語り手」がチンギスを逃してしまうという失態を犯してしまったため、「語り手」がタイチウド陣営（ジャムカ陣営）から離れざるをえなくなるという別れの予兆を表わしているし、次の事例である § 118 では、しばし親しみ合ったチンギスとジャムカが再び別れるという事態になり、「語り手」もこの事態に連動してジャムカと別れることになったことを示している。最後の事例である § 193 においては、非明示的なレベルにおいて、「語り手」とジャムカが力を合わせてナイマン軍を攻めているような言語トリックとなっているが、この箇所は「語り手」がジャムカと絡む最後の叙述となっているのである。

以上のことは、§ 81 の“怖がりの若者” = 「語り手」という本稿での仮説を傍証しているといえるのである。

3. まとめ

以上、筆者のこれまでの秘史研究に関する 7 つの論考の概要を示した。振り返って眺めると、これらはテーマとして大きく二つに分けられうる。ひとつは、タタル集団をめぐる (1) ~ (4) の 4 つの考察であり、もう一つは、「語り手」をめぐる (5) ~ (7) の 3 つの考察である。後者の考察においては、“我々”表現との関連で想定できる人物を指す場合には「語り手」、それ以外の、秘史の意図が立ち現れてくる場合に想定できる人物を「作者」

というように、「語り手」と「作者」との間の使い分けをしておいた。しかし、「作者」と「語り手」が重複していることも一部観察された。とはいえ、「語り手」が関与している部分は「作者」よりもはるかに少ないので、多少重複が見られたからといって、「作者」＝「語り手」というには幾つか問題もある。

実際のところ、現在の「作者」の定義はそれほど厳密なものではない。むしろ、この問題は、秘史全体の創作や編集がどのようにおこなわれたかという問題と密接に関わっていることは論を俟たない。いずれにせよ、「作者」の議論はさらなる深い考察が要され、これについては、定義も含めて、今後の課題としたい。

引用文献（ただし筆者の秘史関連論文は本文にあるので省略してある）

小沢重男

1997 『元朝秘史』岩波文庫 上下巻

1984～1989 『元朝秘史全釈』3巻及び『元朝秘史全釈続攷』3巻 風間書房

栗林均・碓精扎布（編）

2001 『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』東北アジア研究センター叢書第4号

栗林均（編）

2009 『「元朝秘史」モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』東北アジア研究センター叢書第33号、東北大学東北アジア研究センター

藤井麻湖（＝藤井真湖）

2001b 『伝承の喪失と構造分析の行方』日本エディタースクール出版部

2003 『モンゴル英雄叙事詩の構造研究』風響社

ロラン・バルト（花輪光訳）

1979 『物語の構造分析』みすず書房[原著名は Introduction à l'analyse structurale des recits]

[資料編] (6) の論文の再録

『元朝秘史』における「語り手」 — “サアリ草原” という地名との関連で —

1. はじめに

『元朝秘史』(以下、秘史)には「語り手」の存在をうかがわせる「我々の兵士たち」というような“我々”表現が時に現れる。この「語り手」はいったい何者なのであろうか? これは秘史研究における主要な関心事のひとつであり、私はこの問題へのひとつの有効なアプローチとして、第5章では秘史のテキストのみに依拠するテキスト分析を試みた。そこにおいては、秘史の“語り手”がもともとタイチウドに属していて、タイチウドからチンギス陣営に移行した可能性を論じたⁱ⁾。興味深いことに、その考察においては、「語り手」の登場する箇所には多く“サアリ草原”という地名が現れていることが判明した。

本論では、この点を重視し、秘史で“サアリ草原”という語が出てくるすべての文脈を考察することにした。栗林(2001,2009)に基づけばⁱⁱ⁾、“サアリ草原”は秘史において合計10回登場する。内訳は、Sa'ari-ke'erは§161, 05:31:10の1回、Sa'ari-ke'ereは§128, 04:02:06, §177, 06:29:06, §197, 07:45:04の計3回、Sa'ari-ke'eriは§193の07:22:08, 07:23:03, 07:23:07, 07:24:07, 07:25:02, §250の11:11:02の計6回である。出現する順番に並べると、表1となる。①~⑧までの事例は第5章ですでに検討したものである。それゆえ、ここでは⑨と⑩を考察したい。なお、秘史の日本語訳は小沢(1997)とde Rachewiltz(2004)を参照にしたⁱⁱⁱ⁾。

表1：“サアリ草原”の登場箇所

番号	表現形式	箇所(巻・§と四部叢刊本の巻:丁:行)
①	Sa'ari-ke'ere	巻4 §128 (04:02:06)
②	Sa'ari-ke'er	巻5 §161 (05:31:10)
③	Sa'ari-ke'ere	巻6 §177 (06:29:06)
④	Sa'ari-ke'eri	巻7 §193 (07:22:08)
⑤	Sa'ari-ke'eri	巻7 §193 (07:23:03)
⑥	Sa'ari-ke'eri	巻7 §193 (07:23:07)
⑦	Sa'ari-ke'eri	巻7 §193 (07:24:07)

⑧	Sa'ari-ke'eri	巻 7 § 193 (07 : 25 : 02)
⑨	Sa'ari-ke'er-e	巻 7 § 197 (07 : 45 : 04)
⑩	Sa'ari-ke'eri	巻 11 § 250 (11 : 11 : 02)

⑨番(巻 7 § 197) : ここで、チンギス軍はメルキトのトクトア・ベキと対戦しているのが、その舞台は“サアリ草原”となっている。それゆえ、この戦いには「語り手」が参加していた可能性がある。そしてこの戦いが行われている時に、ホアス・メルキトのダイル・ウスンが自分の娘である“クラン妃”をチンギスに与えようとする。この叙述の前に、トクトア・ベキがクドウ、チラウンなる我が子たちを連れて少ない人数で逃れ去ったという内容があるので、メルキトは敗色濃厚となつたらしい。そこで、ダイル・ウスンは、チンギスを懐柔するために、娘をチンギスに与えようとしたのだと推測される。興味深いことは、ダイル・ウスンが娘をチンギスのもとに連れて行く道中に、バアリンのナヤアに遭遇していることである。ナヤアは戦乱をうまく避けて、この父娘を三日後に無事にチンギスのもとに送り届けている。

ここで、語り手と密接に関係がある“サアリ草原”でナヤアが登場しているのは興味深い。なぜなら、「語り手」とナヤアの間には共通点があるからである。彼らは両者とも、もともとタイチウドの陣営にいて、後にチンギス陣営に入ったからである。それゆえ、“サアリ草原”で突如としてナヤアが登場することは、彼らは同一人物ではないかという可能性を浮上させる。むろん理論的には別々の人物とみなすこともできるが、同一人物の可能性の方が高いのではないと思われる。なぜなら、第 5 章での考察に従えば、巻 5 § 149 に明示的に記されているナヤアのチンギスへの帰順の仕方は「語り手」が理想とするような帰順の仕方だからである。その理想とは、主君への忠義を最後まで尽くすというものである。実際に、ナヤアは、自分の主君であるタイチウドのタルクタイ・キリルトクをチンギスに引き渡さないで解放した後チンギスに帰順している。しかも、これが戦略的なものであったことが明示的に示されていることは注意を引く。ナヤアは次のように父や兄弟に進言している。

もし私たちがこのタルクタイを捕虜にして行けば、チンギス・ハーンは私たちのことを(次のように)言うだろう。「自分たちの主人に手をかけた人々を信頼できるだろうか？彼らはどうやって私たちの仲間であることができるだろうか？彼らは仲間づきあいをするのに、ふさわしい人々ではない。自分たちの主人を手にかけて人々は斬られるべきである。」(チンギスの考えをみると) 私たちは斬られるのではなかろうか？こんなことをするより

も、タルグタイを解放してやり、チンギス・ハーンのところに行って、(次のように)言おう。「私たちは身一つでチンギス・ハーンにお仕えするためにやってきました。」私たちは言おう。「私たちはタルグタイを捕まえて途中までできました。しかし私たちは主君をどうすることもできませんでした。」自問自答しながら言った。「私たちはどうして目の前で自分たちの主君を死なせることができるだろうか。私たちは彼を自由にした。そのうえで(チンギスに)お仕えしよう。」(§ 149)

実際のところ、ナヤアの戦略は正しかったことが判明する。チンギスは、もしナヤア達が主君であるタルグタイを連れてきていたらナヤア達を斬らせていたと言っている。そして、チンギスはナヤアを誉めて許している。チンギスの忠義についての考え方を理解して帰順した人物は秘史ではナヤア以外にいない。

上記の§ 149 の内容はナヤアの帰順のさいの状況であるが、この帰順が§ 148 のすぐ後に叙述されていることは重要である。§ 148 は次のようなものである。ここでは短いので全文を引用しておく。

そのときに、チンギス・ハーンはタイチウドを掠奪し、全滅させた。タイチウドのアウトチュ・バートル、コトン・オルチャン、クドウダル等を一のーに到るまで、灰のごとく一掃させた。そして彼らの(支配していた)人々を移動させてきて、クバ・カヤの地に冬営した。(§ 148)

§ 148 と § 149 の配置関係は、ナヤアの帰順が、主君タルグタイ・キリルトクが率いるタイチウドが全滅させられた後に行われたことをはっきりと示している。つまり、ナヤアのチンギスへの帰順は、主君タルグタイへの裏切りではなく、臣下として礼を尽くした後には仕方なくおこなった行為であったことが強調されている。

しかし、実は、ナヤアのチンギスへの帰順の時期は、第 5 章で論じていた「語り手」の帰順の時期と異なっている。ここで論じているナヤアの帰順は § 149 であるのに対して、「語り手」の帰順は § 149 よりもずっと早い § 119 だからである。もし語り手がナヤアであるとしたら、この時間差の理由は説明される必要がある。ただし、§ 119 の「語り手」の帰順は非明示的に示されたものであるのに対して、§ 149 のナヤアの帰順は明示的に示されているという違いはある。しかし、明示的であれ、非明示的であれ、両者が両立しえないことは明らかである。それゆえ、明示的な叙述か非明示的な仮説のどちらかが誤っていることになる。

この場合、明示的な叙述が誤っているのではないかと考えられる。なぜなら、チンギスの忠義の考え方を考慮に入れると、明らかに、第5章で考察したような、「語り手」のチンギスへの非明示的な帰順は許されないものだからである。そこで考察された帰順は、およそ立派ではない。どちらかといえば卑怯な帰順である。チンギスとジャムカが別れたときに、語り手はココチュを連れてジャムカ陣営を離れチンギス陣営にきたからである。つまり、「語り手」はタイチウドのなかで最も早くチンギスに帰順したのである。言い換えれば、語り手は最も早く主君を裏切ったと言える。それゆえ、非明示的に示されたチンギスへの帰順の時期は隠されねばならなかったと推測される。このような理由から、非明示的な帰順のほうが真実であると考えられる。

このように明示的内容が間違っている場合、面白いメカニズムが働くことが観察される。そのメカニズムとは次のようなものである。まず、明示的内容が間違っていることが判明する。次に、なぜそのように間違ったことが書かれたのかという疑問が生じる。そして、この疑問に答えようとする、普段は隠されている「語り手」の存在が立ち現われてくる、という具合である。

⑩（巻11 §250）：この事例は⑨と同様に重要である。当該節は比較的短いので、全文を引用しておきたい。

その戦争で、チンギス・ハーンはキタドの人々の金皇帝を帰順させ、大量の繻子を手に入れた。そして彼はまたカシン（合申）の人々のボルハン皇帝を帰順させ、大群の駱駝を手に入れた。そうして、羊の年の戦争で、アクタイという名前のキタドの人々の金皇帝と、タンウドの人々のイルク・ボルハンを帰順させて帰還し、サアリ草原に下営した。（§250, 下線部藤井）

本節 §250 はそれ以前の §248 と §249 ふたつの節を要約した内容になっている。それゆえ、まず §248 と §249 の要約をしておきたい。まず、§248 においては、チンギスの対金国戦において優位に立ったチンギス陣営を懐柔するために、金国の有能な官僚である オンギンチンサン 王京丞相が金皇帝にモンゴルと和議をはかるように進言する。彼は財貨だけでなく乙女をチンギスによう提案する。金皇帝はこの進言を受け入れ、チンギスに“公主という名の乙女 *Günjü neretei öki*” を与える。本節の最後の部分は次のようになっている。

彼らが和睦にきたとき、チンギス・ハーンは彼らの和議に応じた。（チンギスは）様々な

都市を攻撃していた軍兵たちを撤退させた。王京丞相は、莫州、撫州という名の山脚までチンギス・ハーンにお供をし帰還した。我々の兵士たちは、縋子や財物を何重もの重い絹の縛り紐で縛って、積めるだけ積んで去って行った (§ 248, 下線部藤井)。

金国の丞相はチンギスを途中まで見送った。ここで注目すべきことは、チンギス陣営のなかに「語り手」の存在をうかがわせる“我々の兵士たち”という表現が登場していることである。⑨で議論したように、ナヤアがチンギスの信頼を得た理由は、戦乱の非常時であったとしても、敵の陣営から美しい女性を無事にチンギスのもとに連れてきたという事実にあったことを思い出す必要がある。これに基づけば、チンギスが金国の乙女を出迎える一行の中にナヤアが起用されたとしても不思議ではない。

続く § 249 では、チンギスが合申（西夏）に出馬したとき、西夏の王ボルハン Burqan がチンギスに帰順してチンギス陣営の右翼となり、さらに、チャカという娘 Čaqa neretei öki をチンギスに与えようと言ったという内容が叙述されている。注目すべきことは、ここでもチンギスの敵が前節の § 248 と同様に娘を与えようとしていることである。この § 249 においては“我々の兵士たち”というような「語り手」の存在を示す“我々”表現は出現していないのであるが、この西夏のボルハン王の娘を連れてくる一行の中に「語り手」が加わっていた可能性は高い。なぜなら、§ 249 においては“我々”表現もなければ、“サアリ草原”という表現も出てこないものの、続く § 250 はこれらふたつの § 248 と § 249 の節で叙述された事柄を繰り返している内容となっており、しかも、この § 250 の結末部分において、上に引用したように、チンギス陣営が“サアリ草原”に下営したとあるからである。

つまり、§ 248 から § 250 までの 3 つの節は密接に関わっている。重要なので繰り返すと、3 つの節を連結させる理由は 2 つある。1 つは、「語り手」の存在を強力に示唆する“我々”表現が § 248 に観察されることである。もう 1 つは、§ 248 と § 249 とを要約する § 250 に“サアリ草原”という表現が登場していることである。とくに、§ 250 の手前の 2 つの節では、2 人の敵がチンギスを懐柔するために自分の娘を与えていることは注意を引く。この内容は、ナヤアが敵の娘を無事にチンギスのもとに連れてきた⑨の内容と一致しているからである。これら 3 つの事例をとおして、バアリンのナヤアこそ、「語り手」と同一人物ではないかという仮説を提起することができる。

これを踏まえ、次節においてはナヤアの登場する箇所を考察してみたい。

2. ナヤア Naya' a

秘史においてナヤアが登場する箇所を出現の早いものから順に挙げると表2のようになる。

表2 秘史におけるナヤア Naya'a の出現箇所

番号	表現形式	出現する巻と節（四部叢刊の巻・丁・行）
①	Naya'a	巻5 § 149 (05:01:08)
②	Naya'a	巻5 § 149 (05:02:02)
③	Naya'a+tan	巻5 § 149 (05:05:03)
④	Naya'a	巻5 § 149 (05:05:06)
⑤	Naya'a-yin	巻5 § 149 (05:06:07)
⑥	Naya'a	巻5 § 149 (05:06:10)
⑦	Naya'a-yi	巻5 § 149 (05:07:09)
⑧	Naya'a	巻7 § 197 (07:47:03)
⑨	Naya'a-dača	巻7 § 197 (07:47:06)
⑩	Naya'a-tur	巻7 § 197 (07:47:08)
⑪	Naya'a-dača	巻7 § 197 (07:47:09)
⑫	Naya'a	巻7 § 197 (07:48:02)
⑬	Naya'a-yin	巻7 § 197 (07:48:10)
⑭	Naya'a-da	巻9 § 220 (09:27:04)
⑮	Naya'a	巻9 § 220 (09:27:05)
⑯	Naya'a	巻9 § 220 (09:27:07)
⑰	Naya'a	巻9 § 220 (09:27:10)
⑱	Naya'a-bilji'ür	巻9 § 220 (09:28:01)
⑲	Naya'a	巻9 § 220 (09:29:01)

表2をみると、ナヤアの出現する箇所は § 149 に7回、 § 197 に6回、 § 220 に6回の計19回である。秘史にまんべんなく登場するというよりも、3つの節に集中して出現しているといえる。 § 149 においては、ナヤアは直接的な主人であるタイチウドのタルグタイ・キリルトクを自由にしてやってから、チンギス陣営に降ってきたことが記されている。これについては先に議論したので、ここでは省略する。

ナヤアが登場する次の § 197 では、チンギス陣営の対メルキト戦の最中に、ホアス・メ

ルキトのダイル・ウスンが自分の娘クランをチンギスに捧げようとする。ダイル・ウスンはチンギス陣営の兵士たちに阻まれるものの、折よくナヤアが現れて、ダイル・ウスンと娘のクラン妃を無事にチンギスに届けている。ナヤアに助けられたクラン妃の次のような発言は興味深い。この箇所を【A】としておく。

【A】ナヤアは言いました。「私はチンギス・ハーンの大長官である。我々は共におまえの娘をハーンに献上しよう。(ハーンのもとに行く) 途上で、兵士たちが厄介なことを起こすかもしれない」と言って勧めなかったのです。もし、ナヤア以外の人に遭っていたら、厄介なことが起こったでしょう。そうすると、このナヤアに遭えたのは私たちの幸運でした。もう、ナヤアに関わるよりも、ハーンがお許しなさるなら、天の定めで父母から産まれた私の肌を確かめてはどうでしょうか。(§ 197)

ここで興味深いのは、クラン妃がナヤアを擁護していることである。「語り手」が4人の拾い子をチンギスの実母ホエルンに捧げることによって、ホエルンとの間に良好な関係を築いたらしいことや、「語り手」も参加していたチンギス軍に夫を殺された、タイチウドのカダアンに配慮していたことは既に第5章で指摘していた。ここでもクラン妃の言葉は、「語り手」が女性と良好な関係を築いたことを示している。

ナヤアについての最後の事例は§ 220 である。ここでの叙述はすべてチンギスの言葉から構成されており、そこでは再び§ 149 の内容が繰り返されている。それゆえ、ここには新しい内容は見られない。しかし、注目すべきことは、この節の末尾にチンギスがナヤアをボオルチとムカリと並んで、「中の万戸」を統べさせたとする内容である。

ところで興味深いことに、ナヤアは、Naya'a Biljiür すなわち“おしゃべりナヤア”と呼ばれている。この表現は注意を引く。なぜなら、「語り手」がナヤアであるとする、そのように表現されたとしても不思議ではないからである。Biljiür (雲雀) という語は秘史においては2回出現している。もう一つは巻2 § 77 に出現している。§ 77 は、チンギスとその弟カサルが異母兄弟のベクテルを殺害する場面であるが、殺害の動機を語るチンギスとカサルの言葉に次のような事柄が触れられている。

先に一度、ビルジュール (雲雀) を射落とされたのを彼らは奪い取った。いままたこのように奪った。我等は一緒にどうやって暮らせようか。(§ 77)

しかし、実は、上記の事件そのものは秘史の中に叙述されてはいない。もしここで言う

ところのビルジュール（雲雀）がナヤアの隠喩であるとする、興味深い。なぜなら、§ 77のこの雲雀事件は、ベクテル殺害の原因をつくった2つの事件のうち1つとなっているからである。つまり、チンギスとカサルカサルの2人とベクテルとベルグテイベルグテイの2人は「語り手」＝ナヤアをめぐって争いになったということであり、その争いに勝利したのが後者の2人であったということの意味しているからである。このことは、第4章でも論じた、秘史の作者がベルクテイベルクテイに好意的であるという著者の論とも符合している。さらに、ここでは、前述のような、ナヤアの自己愛的趣向ナルシシズムも顕著であることは特筆に値する。ナヤアはチンギスとベルクテイベルクテイに奪い合いをさせるほどに人気者であった、ということになるからであるiv)。

3. バアリンの科尔チ・ウスンとの関係でみたナヤア

3. 1. バアリンの重要性

前節を踏まえてもう一步踏み込んで検討すべきことだと思われることがある。それは、ナヤアを彼の出身集団であるバアリンのリプレゼンタティブ「代表」とみなすべきなのか、バアリンでもその下位集団のニチュグウト・バアリンニチュグウト・バアリンの代表とみなすべきなのか、あるいは、あくまでも個人という観点からみなすべきなのかということである。本節ではどれがより妥当な見方なのかを議論することにしたい。

考察の手始めとして、バアリンの科尔チ・ウスン（以下、科尔チ）という人物に注目してみたい。なぜなら、秘史でバアリンといえば、本論で議論をしているナヤアよりも、チンギスをジャムカよりも王に相応しいという天の予兆を述べる科尔チのほうが有名だと思われるからである。実際、科尔チはバアリンの主要な下位集団であるメネン・バアリンメネン・バアリンの首長であるのに対して、ナヤアは少数派のニチュグト・バアリンニチュグト・バアリンに属していた。秘史における科尔チの最初の記事は、ジャムカとの関連において叙述されている点で重要である。科尔チは言う。

聖なるボドンチャルの捕えた女より生まれた我々は、ジャムカと腹一つ、羊水を一つにしたものである。（それゆえ今までは）我々はジャムカから離れないできた。しかし天の予兆があった。（§ 121）

科尔チはもともとジャムカ陣営に属していたが、ジャムカとチンギスが決別したときにチンギス陣営にやってきたのであった。人々は、ジャムカとチンギスの不和が発生したときに、どちらに忠誠を尽くすべきかを決めなければならない状況に直面したのであろう。

とくに、上記のコルチの言葉は注目しうる。なぜなら、コルチは、母系でジャムカとつながっているという自分自身の系譜を明らかにしているからである。実際のところ、そのことは、すでに秘史の巻1の§41において、バアリンが父方ではチンギスと同じ祖先ボドンチャルに由来していること、しかし母方においてはボドンチャルの正妻ではなく非正妻に由来することが説明されている。そして、この非正妻はアダムカ・ウリヤンハイの出身で、ボドンチャルによって略奪されてきたのだと叙述されている。以下にこれを引用しておく。

その女はまた、ボドンチャルのもとで一人の子供を産んだ。捕えて娶った女だと言って、その子をバアリダイと名付けた。彼はバアリンの祖先になった。(§41)

ここで重要なことは、バアリンが父方においてチンギスと同じ先祖をもつ点で、チンギスの集団と対抗できる集団と見なされうることである。

これに関連して指摘しておくべきことがある。それは、チンギスの重要性を考慮に入れると、ボドンチャルの正妻がどの集団の出身者かということは当然ながら秘史に記されているはずだと推測するのであるが、実際のところ、秘史においては、この正妻の出自どころか、名前にも言及されていないことである。ボドンチャルの正妻のこの匿名性は、バアリンの重要性を高めることに寄与しているといえる。

ところで、コルチの天の予兆とは次のようなものである。

「しかし天の予兆が私の目の前に現れた。淡黄色の牡牛が来た。それはジャムカの周りをめぐって、自分の角でジャムカの車に乗っている天幕を突いた。そして自分の片方の角をこわしながらジャムカを突いた。(そうやったために)不揃いの角になってしまったが、「わたしの角を持ってこい」と言い続けた。(そして)ジャムカのところに立ったまま彼に向って繰り返し吼え、地面を蹴って土埃を巻き上げた。(すると)角のない淡黄色の牛がながえを持ち上げ、自分の身体に取り付け、テムジンの後から車を引いて行った。大きな道をテムジンの後ろに続きながら進み、ずっと吼え続けた。天と地が唱和して『テムジンが人々の主人となるように』と人々を運んでそれを彼に与えるために近づいてきた。このような天の予兆を私の目に見せた。テムジン、もしおまえが人々の主人になるのなら、この吉兆に対して、私をどのように喜ばせるのか。」と言った。(§121)

なぜコルチ・ウスンがこのような天の予兆を告げるような立場にあったのかは、秘史では何も説明がなされていない。

以上の考察で言えることは、バアリンの一員であることによって、ナヤアがチンギスの系譜に対比しうる集団の出身者だということである。

3. 2. バアリンよりもニチュグト・バアリンの重要性

次に検討すべきことは、ナヤアをどの程度ニチュグト・バアリン—バアリンの下位集団の一員として見なすべきかということである。結論から言うと、彼がニチュグト・バアリンに属していることは重要視されるべきことと思われる。なぜなら、秘史にはナヤアをコルチと対比させようとする意図があるように思われるからである。コルチは、前述のように、バアリンの主流下位集団であるメネン・バアリンの首長である。ナヤアとコルチの対比は、次のように説明しうるであろう。

第5章に従えば、「語り手」は巻3 § 119 の時点で社会的あるいは政治的に所属していたタイチウドの集団からチンギス陣営に移った。これに対して、コルチは自身の出身集団であるバアリン—この集団はジャムカを支持していた—からチンギス陣営に § 120 の時点で移った。一言でいえば、「語り手」のチンギス陣営への移行はコルチの移行よりも1節だけ前の時点で行われていることが観察される。

このことは、「語り手」とコルチがほぼ同時期にチンギス陣営へ移行したことを示している。そして、このことは「語り手」がナヤアである可能性を支持しているといえる。なぜなら、ナヤアもまたバアリンの人間で、かつては政治的にタイチウトに属しており、コルチと同じようにチンギス陣営に移行したからである。しかし、「語り手」=ナヤアがチンギス陣営にコルチよりも1節だけ早い時点で移動していることについては別の解釈もできる。この解釈に関連する箇所として § 120 の末尾を見てみよう。

バアリンのコルチ・ウスン老、ココチョスはメネン・バアリンを連れて一軍団としてやって来た。(§ 120, 下線部藤井)

§ 120 の締めくくりの文は、先に引用した § 121 の最初の文につながっている。そこでは、コルチが母系的にジャムカとつながっていることが叙述されている。コルチがチンギス陣営に移行したことについての叙述の中で注目すべきことは、コルチがバアリンではなく、“メネン・バアリン”を率いて来たということである。後者は前者の一部であり、それゆえ、コルチはバアリンの代表者^{リアリゼンタティヴ}ではないことが含意されているといえる。

コルチがバアリンの代表者ではないとすると、ナヤアの存在意義は強まることになる。なぜなら、ナヤアもニチュグト・バアリンの首長的存在である点で、メネン・バアリンの

コルチと同等の地位にあることになるからである。この点からみると、「語り手」がメネン・バアリンのコルチよりも1節だけ前の時点でチンギス陣営に移行したことは前述とは異なる意味を帯びるようになる。すなわち、「語り手」＝ナヤアはコルチよりも早くチンギスの能力を見抜くことができたということを示すのである。ここではナヤアの自己愛的趣向が見え隠れしている。

以上の主要な論点をまとめると次のようになる。第一に、ナヤアは広義にはバアリンとして、狭義にはメネン・バアリンと対比されるニチュグト・バアリンとしてみなされうる。第二に、しかしながら、後者は前者よりも重要な意味をもっているということである。

3. 3. 集団としてよりも個人の重要性

本節では、ナヤアが、最終的には、広義か狭義に関わらず、集団としてよりも、独立した個人として描かれていることを示すことにしたい。なぜなら、ナヤアの集団すなわち少数派集団であるニチュグト・バアリンを強調することにはたいして意味がないように思われるからである。実際のところ、ナヤアがニチュグト・バアリンの代表者とみなされるべきかどうかは疑わしい。なぜなら、ナヤアは、チンギスに投降した際においても、実際には、家単位で行動しており、集団単位ではないからである。そして、その後は家単位ですらなく、彼は単独行動していることが観察される。

こうした行動の個性だけでなく、ナヤアについてもっと強調されるべきことと思われるのは、秘史の他の人物たちには見られない彼の特別な才能である。それは、女性からの信頼である。前述したように、メルキトのクラン妃がナヤアをチンギスから庇ったことがその一例である。チンギスが自分のもとに連れてくるのが遅くなったかどでナヤアを疑い責めたときに、クラン妃はナヤアを庇ったのである（【A】を参照）。

この種の信頼はコルチによっては獲得されえなかったであろう。なぜなら、コルチは女性に対して過剰な欲望をもっていたと叙述されているからである。コルチは§ 197 でチンギスに天の予兆を告げたあと、次のように言う。

多くの偉大な事柄を予言した人間である私にとって、単に万戸の首長となっても、どれほどの幸せであろう。しかし、万戸の首長にしたあとで、さらに私に美しくて素晴らしい乙女を人々の中から自由に選ばせ、(その中から) 三十人の妻を娶らせてくれ。(§ 197)

このように、コルチは30人の妻をもつことを望んだというほどの女性好きであったことが叙述されている。もしチンギスが敵側から美しい乙女たちを自分に送り届ける任務をコ

ルチに任すとすれば、コルチはもっとも信頼のおけない人物であったといえるであろう。これを証明するかのように、秘史には、チンギスがそのような任務をコルチに任せたという叙述は全くない。

コルチとは対照的に、ナヤアは敵側の女性たちをチンギスのもとに無事に送り届けるという任務を常に持っていたことが観察される。ここで意味している女性たちとは3人の女性たちのことである。すなわち、ホアス・メルキトのダイル・ウスの娘クラン妃、金国皇帝の“公主という名の乙女”、それから合申（西夏）の王ボルハンの娘チャカである。上記で示したような、ナヤアの女性に対する紳士的な態度はコルチとは正反対である。そしてこの紳士の性格は、集団的な観点からではなく、独立した個人という観点から説明されるべきであろう。

以上の議論を要約すると、ナヤアのアイデンティティは三重に構成されていると考えられる。第一に、広義のバアリンというアイデンティティ、第二に、「ニチュグト・バアリン」というバアリンの下位集団という狭義のアイデンティティ、第三に、ナヤア個人としてのアイデンティティである。

4. 今後の課題

本研究は、「語り手」の存在をうかがわせる“サアリ草原”という地名をもとに、秘史の「語り手」を探る試みであった。「我々の兵士たち」というような“我々”表現は巻3§110から巻11の§263までの範囲に現れているので、「語り手」はこの範囲に関係していたと考えられる。他方、本論で秘史の「語り手」と同定したナヤアという人物名は、巻5§149から巻9§220の間で観察される。とすると、ナヤアの出現範囲は「語り手」の存在がうかがわれる範囲の中に含まれていることになるので、ナヤアは少なくとも、「語り手」の活動範囲と同じ巻3§110から巻11§263までの範囲で関わっているとみてよいだろう。

ところで、議論を不必要に混乱させるので、本論では「語り手」と作者という語の間の区別を明確にすることを避けてきた。第5章においては、「我々の兵士たち」というような“我々”表現と関係する場合には「語り手」という用語を使い、「作者」という用語は秘史全体の意図に関わる場合に用いることを提案した。もしこの用法に従うならば、両者の関わる範囲が重複することは明らかである。なぜなら、“サアリ草原”という地名は両者の関わる言説のなかで観察されるからである。このことは、ナヤアが「作者」であることを示している。

しかし、秘史の作者についての議論はそう単純なものではないように思われる。本論に関わる範囲で言えば、以上に議論したように、明示的に記されたナヤアのチンギスへの投

降の時期は誤っており、こうした誤ったことをナヤアはなぜ堂々と叙述できたのかという疑問が残るからである。この理由を考えてみると、ナヤアがそのように嘘をつくことを手助けした人間がいたと考える余地は充分にある。ナヤアを手助けした人物を「作者」と呼ぶべきかどうかはわからないが、そうした人物がいたという可能性は否めない。

それでは、そうした人物がいたとすると、それは誰なのであろうか。なぜ、その人物はナヤアを手助けしたのであろうか。その人物は秘史全体に関わったのか、それとも一部だけなのか。どのような関係がナヤアとその人物の間にあったのか。そして、秘史の編集作業は本論での議論とどのように関係するのか。これらの問題についてはさらなる考察が必要であり、今後の課題としたい。

チンギスは妻ボルテをメルキトに奪われたさい、ケレイトの王罕に救援を要請する。王罕はジャムカにも対メルキト戦に参加させる。「語り手」が初めて登場するのは、ボルテ夫人救援のために急遽編成されたこの3部隊の中である (§ 110)。このことは、「語り手」が王罕の部隊かジャムカの部隊の中にいた人物だということを示している。そして、3軍でボルテを奪回し王罕が故地に帰った以降においてさえ、「語り手」はタイチウドのベストの宿営地に取り残されていたククチュという幼児をチンギスの母ホエルンに贈呈していることが観察される (§ 119)。それゆえ、「語り手」は王罕の部隊ではなく、ジャムカの部隊にいたことになる。不思議なことに、ジャムカの部隊にいたと想定されるにもかかわらず、ククチュを連れてくるさいに、「語り手」はチンギス陣営の人間として叙述されている。この矛盾を解決するには、ククチュをホエルンのもともと連れて来たまさにその時に、「語り手」はジャムカ陣営からチンギス陣営に移動したというように解釈せざるをえない。つまり、「語り手」は、必ずしもタイチウドの出身者でなくともよいが、もともとタイチウドに属していた。そしてタイチウドはジャムカ陣営にいた。これに基づけば、「語り手」はジャムカとチンギスが決別したすぐあとにジャムカ陣営からチンギス陣営に移行したということになる。

ii 栗林均・确精扎布(編)『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引, 東北アジア研究センター叢書第4号, 東北大学東北アジア研究センター, 栗林均(編)2001年, 『「元朝秘史」モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』, 東北アジア研究センター叢書第33号, 東北大学東北アジア研究センター2009年を参照。

iii 小沢重男, 『元朝秘史』岩波文庫上下巻, 1997年, de.Rachewiltz, Igor., The Secret History of the Mongols—A Mongolian Epic Chronicle of the Thirteenth Century, Brill's Inner Asian Library, Reiden・Boston, Volume One and Two. 2004.

iv こうした秘かな自己愛的趣向(ナルシシズム)は英雄叙事詩の作者に当てはまるものである。これについては、藤井麻湖, 『伝承の衰退と構造分析の行方—モンゴル英雄叙事詩の隠された主人公—』日本エディタースクール出版社2001年, 藤井麻湖, 『モンゴル英雄叙事詩の構造分析』風響社2003年を参照。

引用文献

de.Rachewiltz,Igor.

2004 The Secret History of the Mongols—A Mongolian Epic Chronicle of the Thirteenth Century, Brill’ s Inner Asian Library ,Reiden・Boston, Volume One and Two.

藤井麻湖 (=真湖)

2001 『伝承の衰退と構造分析の行方—モンゴル英雄叙事詩の隠された主人公—』
日本エディタースクール出版社

2003 『モンゴル英雄叙事詩の構造分析』風響社

2011a 『元朝秘史』におけるベクテル、ベルグテイ、“ベルグテイの母”の考察—“ベルグテイの母”の出身仮説をもとに—『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』第6号

2011b 『元朝秘史』の地の文における“我々”表現に隠された意図—巻3第110節～巻11第263節における一人称複数形についての考察—『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』第7号

栗林均・确精扎布 (編)

2001 『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』,東北アジア研究センター叢書第4号,東北大学東北アジア研究センター

栗林均 (編)

2009 『「元朝秘史」モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』,東北アジア研究センター叢書第33号,東北大学東北アジア研究センター

小沢重男

1997 『元朝秘史』岩波文庫 上下巻

(ふじい まこ・愛知淑徳大学交流文化学部)

A Study on *The Secret History of the Mongols*(SHM) in terms of
'Mongolian Heroic Epics' : Seven papers' summary of the author's
research

FUJII Mako

Summary :

This paper is a collection of summaries of the author's research on the SHM. One of these papers is supplemented in the appendix, as it is not easily available in Japan.

Titles of the author's papers are as follows:

1. "The Shifting Legends of Gengis Khan: An analysis of the pamphlet *The Land of the Legends and History of Gengis Khan*" [in Japanese], in *Research on Contemporary Society* (Aichi Shukutoku University), No.4(2009), pp.41-56.
2. "Toward the Integrated Interpretation of the § 53 to § 68 of *The Secret History of the Mongols*" [in Japanese] , in *Journal of Linguistic and Cultural Studies* , No.34(2010), pp.167–179.
3. "A New Interpretation of the Passage on Empress Yesüi in Chapter 268 of *The Secret History of the Mongols*": The legend of empress Gürbeljin Go'a sheds light on another aspect of the passage" [in Japanese], in *Research on Contemporary Society* (Aichi Shukutoku University) , No.5(2010), pp.77-94.
4. "The Undercurrent Development After the Muder of Begter in *The Secret History of the Mongols*: Viewed from the supposition that Begutei's mother was of Tatar origin" [in Japanese], in *Research on Contemporary Society* (Aichi Shukutoku University), No. 6(2011), pp.21-41.

5. “On the First-person Plural in the Narrative Part of *The Secret History of the Mongols*: A Study on the narrator of the SHM through scrutinizing “we” forms from § 110 to § 263” [in Japanese], in *Research on Contemporary Society* (Aichi Shukutoku University), No.7(2011), pp.45-66.

6. “Identifying the Narrator in the SHM: An investigation of the narrator’s connection with the “Sa’ari ke’er” (Sa’ari Steppe)” [in Japanese with Mongolian translation], in conference proceedings, The Fifth International Symposium in Ulaanbaatar, *Chinggis Khaan and the Mongolian Empire: History, Culture and Legacy* (Tuesday, 24 July to Thursday, 26 July, 2012, at Mongolia-Japan Center for Human Resources Development, Ulaanbaatar, Mongolia)(2013), pp.112-140.

7. “Sorqan_šira and Jebe in *The Secret History of the Mongols*: Based on a hypothesis that ‘gelbüre kö’ün’ is the narrator” in *Research on Contemporary Society* (Aichi Shukutoku University), No.9 (2013), pp.17-34.